

産業医・山川和夫さん死去

長時間労働対策に尽力

共同通信の産業医として、「過重負荷面談」などを担当され長時間労働解消や安全衛生対策に尽力された産業医の山川和夫（やまかわ・かずお）さんが18日、急性心不全のため東京都内の自宅で急逝された。58歳。通夜は20日午後6時から、葬儀・告別式は21日午前11時からいずれも目黒区下目黒1-8-5、大圓寺で。共同労組としても、謹んでお悔やみを申し上げ、ご冥福をお祈りする。
（いのちと健康対策部長 島崎 淳）

山川さんは1976年東大医学部卒業後、磯子中央病院（横浜市）内科部長などを経て、腎臓移植普及会理事長、日本腎臓移植ネットワーク専務理事を歴任した腎臓移植医療の専門家。科学部には取材先としてお付き合いされた方もいるという。ご自身が救急医療の現場で非常に過酷な長時間労働を続けられていたが、50歳前になって体力の限界を感じ、労働衛生コンサルタントの道に進まれ、ソニーグループなどの産業医も務められた。

体調不良で5月の安全衛生委員会を欠席されたが、その後回復され、元気に仕事を続けられていた。19日は共同に来社、過重負荷面談を行う予定になっていた。

05年に山川さんが産業医になってから、本社の安全衛生委員会の活動は活発化したことは間違いない。それは山川さんの熱意によるところが大きい。月120時間以上の過勤をした本社職員などを対象にした「過重負荷面談」を担当、共同での働き方の実態をつぶさに見てこられた。特に、産業医となった直後にはニューヨーク支局で過労死事件が起き、共同の働き方を「なんとかしなければならぬ」との思いを強くしたという。

温厚な人柄、やさしい語り口。面談では聞き役に徹し、それぞれの働き方をつぶさに見てこられた。職場の実態を熟知した上での発言は、重みがあった。通信社としてどうしても長時間労働が避けられないことも認め、職場に応じた解決策、対応を提唱していた。

安全衛生委員会では、社が契約している立場でありながら、専門家として社に厳しい意見も率直に言われた。昨年10月には組合ニュースのインタビューで「産業医として共同の長時間

労働をどうみているか」を語ってもらったが、山川さんでなかったらインタビューしようという気にはならなかったかもしれないし、実現しなかったかもしれない。

06年の編集改革委員会の議論には山川さんの意見も反映されているほか、「休日休暇のまとめ取り制度」など昨年4月の「長時間労働抑制等の指針」に結実したものもある。SL持ち場での「タクシー・ハイヤー使用基準の柔軟化」も山川さんが積極的に提唱されていたものだった。本社に1台しかなかった自動体外式除細動器（AED）が昨秋、増設されたのも山川さんの鶴の一声だった。

山川さんの意見を社は重視していたし、組合も心強く感じていた。その存在は大きかった。「36・裁量労働制」に関連した「安全衛生委員会の小委員会」の場で、長時間労働解消や仕事の見直しに本格的に取り組もうという矢先に、山川さんを失ったことは共同全体にとって大きな損失だ。共同の職場を働きやすいものにするためにまだまだ力を貸してほしかった。

「よい仕事をするために積極的に休む文化をつくれないうだろうか」。山川さんはインタビューでこう語っていた。そのご遺志を引き継ぎ、組合は長時間労働解消の取り組みをさらに強めていく決意だ。
（了）

